

第2セッション総合討議

カバット氏の発表に対し小池正胤氏より次のような評価と質問が述べられた。黄表紙という特殊な、しかし近世後期のものの考え方を集約的に出しているジャンルの作品をとりあげられた御発表を、興味深くうかがうことができた。とくに『宴遊日記』といった膨大な資料を調査されたことは、多大な労であったと思う。また発表者が出された黄表紙の資料は、ほとんど活字になっているものはない。したがって、発表者はこれらをすべて原典で読まれたはずで、しかも、その読みとり方にも、ほとんど誤りはないように思う。そのことにも敬意を表した。時事的な要素を読みとるという方向も、黄表紙本来の姿にせまるものである。「鬼娘」の変容と捉え方も正確だと思う。ただ、あげられた資料には、鬼娘にかぎらず、黄表紙の特色である「うがち」や「見立て」が見られると思うのだが、その点についてのお考えをうかがいたい。つまり、それは絵をどう読むかという問題にも連なるのだと考えているのだが。

カバット氏は、黄表紙の「化け物づくし」と呼ばれる作品群に、社会的な風刺や風俗を取り入れているものがあることを答えられ、さらに黄表紙の重要な要素に「笑い」を指摘された。小池氏は重ねて、資料にあげられている黄表紙の絵について、その裏の意味を問われ、発表者は、それに適切な解釈を述べられ、小池氏からは絵の時代的な意味についての示唆があった。

イヴォ・スミス氏からレイン・ラウド氏に、インター・テクスチャリティーは読み手の側にある問題のように思うが、本歌取りは作り手の技術だと思われる。あるいは本歌取りは読者の技術と捉えた方がよいのだろうか、その点はどう思われるかとの質問があった。レイン氏は、インター・テクスチャリティーを読み手の側だけに限定するのは狭い、もちろん本歌取りは作者の技術であるが、と答えられた。

大西廣氏が、テキストは時代に対する責任として、つまり作者と読者が対面する場で発生するものであるというミシェル・フコーの言葉を引かれ、三つの

発表すべてが、ある意味で時代と作者、インターテクスチャリティーの交差点
の中でのテキストの発生という問題を語っていたと、まとめとしての感想を述
べられた。